＜責任＞の生成

（著者：
國分功一郎　東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了　東京大学大学院総合文化研究科准教授
熊谷晋一郎　東京大学医学部医学科卒　東京大学先端科学技術研究センター准教授）

まえがき

「人が立派な研究計画書をかくことができるのは、その研究がすでに順調に進んでいるときである。」
「当事者研究」（熊谷晋一郎）と「中動態」（國分功一郎）を出発点として、「最終的には責任の概念の問い直しへと向かった」。

責任　responsibility
↑
応答　response　　←「反応」とも違う！
・返事をする
・自分に向けられた行為や自分が向かいあった出来事に、自分なりの仕方で応ずる

「日常は生きることの出発点ではない。それは生き延びた先にある。」

ハンナ・アレントの「複数性」
・それぞれの人間が自分なりの仕方で応答する可能性が「複数性」
・同じ刺激に対して同じ反応でしか返さないのであれば、そこには「複数性」は存在しない
・アレントは「複数性」を人間の条件の１つとした

<u>序章 「中動態」と「当事者研究」</u>

<u>熊谷晋一郎さんの経験</u>

〇70 年代における身体障害者の状況

・1977 年に脳性麻痺を患って生まれる（手足が不自由）

・70 年代は「障害者を健常者に近づける」のが目標

※現代医学の水準では、健常者に近づけられない病気/障害もある

・当時のリハビリは<u>状況から切り離された</u>スナップショット的な形態模写で、「健常者と同じポーズをとる」だけが目標とされた

例）膝立ちをするリハビリ … 本来は座ってる状態から高いものをとるときの行為

個々の動作 → <u>目的と状況的文脈</u>があって初めて意味が宿る

・当時の熊谷さん「障害というのはわたしの皮膚の内側にあるものではなく、皮膚の外側にあるものなんだ」

〇80 年代にかけて、変化していく状況（「医学モデル」から「社会モデル」へ）

例）熊谷さんが映画を見たいが、映画館に階段しかないとする

70 年代まで：「熊谷さんの足」に問題があると考える ―医学モデル

80 年代から：「エレベーターがない映画館」に問題があると考える ―社会モデル

パラダイムシフトが起こった背景として…

（１） 権威主義から証拠に基づく医学へ

権威主義 … 「偉い先生が「これで治るよ」というからリハビリを行う」

証拠主義 … 「かつては効果があるとされていたリハビリにほとんど効果がないことが分かった」

これにより、当事者が<u>過剰な医療化</u>から解放された

（２） 当事者運動が盛んになった

当事者運動 … 障害者マイノリティ、女性、エスニックマイノリティ、セクシャルマイノリティ

「変わるべきは社会の方！」「私たちが責任を負わされるべきではない！」

〇当事者研究

・始まりは「浦河べてるの家」 … 統合失調者を抱える当事者により始められた

・「比較的周囲に見えにくい困難をもっている人たちのあいだで急速に広がった」

例）精神障害、自閉スペクトラム症、…

・周囲から見てわかりにくい障害は、自分から見てもわかりづらい

―なぜか周りの人と同じように振舞えない、感じられない、名状しがたい差異を経験してきた自覚はある

←→ 身体障害 … 困難やニーズがわかりやすい（黙っていても社会が動いてくれる）

・自分の性格や努力不足に問題があるのではないかと悩み、自分を責めてきた人が多い

どこまで自分の努力で帰ることができて、どこからは援助してもらわなければならないかを類似経験をしている仲間と考えるのが当事者研究

例）アルコール・アノニマス

当事者主権と当事者研究

当事者主権：自分たちのことは自分たちで決める
パターナリズム：「君たちはこれでいいだろうという一方的な介入」

・当事者主権はパターナリズムに反する形で生まれた
・一方で、当事者主権だけではうまく解決できないこともあるので「自分たちは何に困っているのか、何を望んでいるのか」「そもそも私たちは何者なのか」を知ること（当事者研究）が有効になるのでは？
例）自分のこと、自分が望むことがよくわからない
例）自分について知識不足だと自分の努力不足や意志の弱さを責める原因になる
（見境のない自己コントロール）

〇日本の精神保健の現状
「日本の精神保健は、いくらかの改善傾向は認められるものの他国に比べ「脱施設化」が遅れている」

2014 年 OECD データ	精神科ベッド数/人口	平均在院日数
日本	2.6 床/1,000 人	298 日
OECD 加盟国平均	0.7 床/1,000 人	約 36 日

（脱施設化が遅れている理由）
・民間の精神病院の割合が多い
・精神病院に対する地域社会の差別偏見
・統合失調症などに対し、健常者と同じレベルの精神になるまで社会に出してはいけない、という日本の精神保健の考え方（☆）

〇「べてるの家」での考え方

一般的な考え方：直前の（☆）のように「症状は消すべき」と考える
「べてるの家」での考え方：「症状は必ずしも全て消す必要はない」
症状には自分助けの側面があることも考慮して、どのような苦労に対して症状が働くかを考える
「症状をもちつつ生きることを肯定する」

（私見）症状をもちつつ生きることを肯定する」ことの背景には、症状が自分助けの側面があるということである。脳科学的には、抑うつ症状が私たちへの警告サインであることは既に確認済である。しかし、これは精神医学にとどまらず、性格やひいては伝統についても同じことが言えると思う。ただ、適応するために自分を犠牲にしていては、個性は勿論、文化も伝統もなくなっていく。自分の症状や個性がどのような場面でよく働き、ときに悪く作用するのか、その追及こそがより善く生きるためには必要かもしれない。ありのままや Being を仏教で重要視する理由ともいえよう。

当事者研究と責任

外在化：問題行動を本人と切り離して考えること
←→　犯人探し：誰が悪いの？誰が罰せられるべきなの？

・当事者研究では、問題を外在化し、類似の景観をした「仲間の力」を借りて苦労のメカニズムを知る
例）「放火行為」ではなく、「放火現象」として扱う
・当事者研究により、「免責」をすることで、「引責」が生じた
免責：問題行動を本人から切り離すこと
引責：本人が自分のしたことに責任を引き受けられるようになった
・当事者研究により、自分は症状に操られていたんだということに気がつくという現象が次々に起きている

参考例１：「オープン・ダイアローグ」
・北欧で用いられている統合失調症急性期の人に行うもの
・本人に対し、家族がおかしいと思ったら治療チームへ連絡
・治療チームが 24 時間以内にかけつけて、本人の話をひたすら聞く
・話を聞いてもらっているうちに本人の発作が治ることが多い

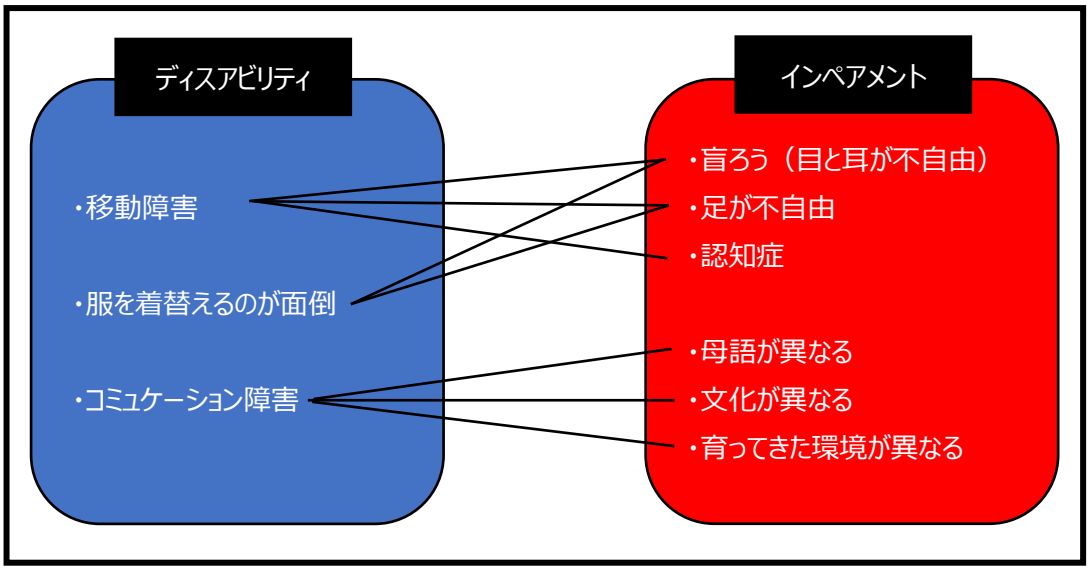
参考例２：國分さんの講演に来た犯罪を行ってしまった男性
・國分さん「自由意志はありません」（講演にて）
・男性「講演を聞いて、初めて罪の意識を感じた」

（私見）私たちがつい犯人探しをしてしまうのは何故だろう？本書ではその問題に対して「責任」の帰属化に原因がある、として取り組んでいる。そして、意志や切断を用いて説明している。一方で、「仲間はずれにはなりたくない」（自分の問題にはしたくない）と「誰かを罰したい」（人の問題にしたい）の両立でさらに踏み込んで説明することはできないだろうか。個人の問題に帰属化させるのがわかりやすいから、人間にはそうした傾向があるというのはわかるが、一方で、脳内において他人を罰した時に快感を得る脳内物質や、自分が仲間外れにされたときに恐怖を感じる脳内物質が働いていることもあるかもしれない。
さらに、当事者研究により、「症状に操られていた」と考えることで救われる人が多いという事実は宗教（自分を超えた概念の存在を認めること）の重要性を説いているのかもしれない。AA12 ステップの中で神が重要視されているのも同じであろう。少し、話は変わるかもしれないが、既に科学においても、私たちは自由意志ではなく、場の隆起によって動かされているという考え方もあり、これらを結びつけて考えるのは面白いかもしれない。

発達障害の当事者研究

ディスアビリティ（皮膚の外）：環境との相互作用で発生したり消えたりする障害
インペアメント（皮膚の内）：身体の特徴として存在し続け、環境から独立した障害

・熊谷さんは、ASD（自閉スペクトラム症）の綾屋紗月さんと『発達障害当事者研究』を行っている
・目的は ASD を「社会モデル」的に吟味しようというもの（ディスアビリティのインペアメント化を目指す）
例）コミュニケーション障害は皮膚の外の問題か、内の問題か（cf. 熊谷さんの移動障害は外の問題）
・発達障害の診断基準に「コミュニケーション障害」があるが、コミュニケーションは二者間で行うことであるから、これは医学モデルの考え方と言わざるをない
例）上司とうまくコミュニケーションがとれないのは本人だけの責任か？
例）DV 夫とうまくコミュニケーションがとれないのは妻だけの責任か？
・ディスアビリティとインペアメントは 1 体 1 では対応しない



・ASD という概念にディスアビリティが混入したものであれば、ASD と診断された人の中でもインペアメントは十人十色になる可能性がある

（私見）発達障害に限らず、鬱病、不安障害、境界性パーソナリティ障害など様々な精神医学用語は同じような問題をはらんでいると思われる。実際、診断もかなり客観性に欠けており、ディスアビリティに注目していることが多いように思う。（私個人が納得いかなかったり、多くの人が偏見を抱いたりするところも同じ理由であるのではないかと思われる。）これらを脳の機能障害としてひとくくりに考え、脳のある数値（例えば血流など）を見れば、どの治療が最適かということが分かるということはないだろうか。鬱病、不安障害、境界性パーソナリティ障害、発達障害など言葉はあふれているが、これらは色の名前と同じで離散的かつ症状が被っているものもあると思われる。光学スペクトラム検査は正にこれにあたるのだろうか。

発達障害の知覚と＜この＞性　（thisness）

〇『発達障害当事者研究』に書かれていること

（１）　綾屋さんの「知覚」と「記憶」について（当初）

例）世界がどんな風に見え、聞こえているのか、身体の内側、内臓の感覚はどのように感じるのか、空腹感はどのように感じるのか、過去の記憶をどのように思い出すのか

例）「お腹がすいた」がわからない、尿意・便意がわかない（例えば、他の様々な感覚から得た情報を振り分けて空腹感を意識しなければならない）

（２）　綾屋さんの「運動」について（2010 年以降）

例）どのように声を出すか

「綾屋さんの場合、…つまり、つねに大量の刺激が等価に意識に上ってきて、しかもそれが意味のまとまりにならないままに、生のデータの感覚に近いものとして意識に浮上するのだ。」

→　キーワードは「感覚飽和」「まとめ上げ（情報のカテゴライズ化）」「絞り込み（情報を振り分ける）」

〇＜この＞性

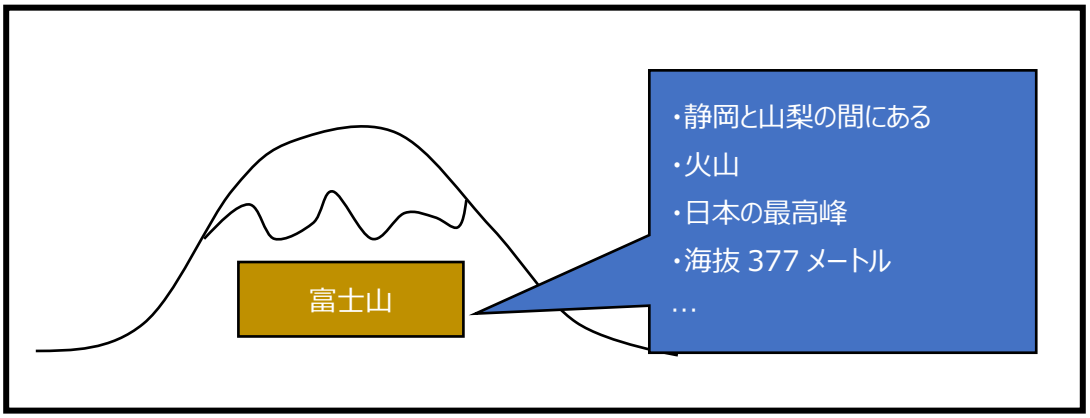
＜この＞性　―　this-ness（英）　―　haecceìtas（ハエッケイタス、スコラ哲学の用語）

ほかならぬこの個体、取り替えがきかないこれとしてこの物やこの人を見るとき、そこには＜この＞性が見出されている　…　「固有名詞」と結びついている

←→　個体をグループの一員とみる（「先生」、「学生」、…）

固有名詞はどのようにして、名指している個体を名指すことができるのか？

→　固有名詞は「説明の束」であり、それを省略したものである（記述主義）と考えられていた



→　記述主義の矛盾を明らかにしたソール・A・クリプキ「固有名は確定記述の束には還元できない」

…　どれだけ確定記述をしても説明しきれない剰余が残る

「クオリア」（松本卓也さん）
「質感」
固有名の＜この＞性を支えているもの

綾屋さんが経験している ASD の知覚を＜この＞性で説明すると…

すべての知覚、外的な刺激が等価なものとしてやってくる

＝

あらゆるものが＜この＞性をもつものとして経験される

→ 外界から処理しきれない、途方もない量の情報を受け取っている

〇世界で最初の自閉症報告（松本卓也さん引用）

・ドナルド君（1934 年、児童精神科医レオ・カナーが報告）のセリフ

「あなたの靴を引っ張って」 ― ドナルド君が靴を脱ぎたいとき

「おしっこに行きたいの？」 ― ドナルド君がトイレしたいとき

→ それぞれ過去の具体的な状況と 1 体 1 で対応させている

→ 表現する度に具体的な状況を追体験している

・ドナルド君は文（sentense）を語（word）に分けず、言葉を 1 回きりの文脈として引きはがさない

一般の人	1 語	→	2 語	→
	ブーブー、ママ	→	ぼくが、ママが	→
ドナルド君	「あなたの靴を引っ張って」、「おしっこに行きたいの？」			
	1 語			

（私見）ASD の知覚が＜この＞性を用いて説明されているが、行動分析学で言い換えると「汎化」ができない状態ということになるだろうか。実験神経症のイヌの例は楕円と円を判別できるようにしたことが要因だったが、ASD はある意味で実験神経症（人間には同じようなものがあるかは知らないが）を起こしにくいということになろうか？（情報を「正確に」受け取り、判別することができる。）そして、ここで論じられているように「汎化」ができない状態では多量の情報を処理する必要が出てくる。行動の「汎化」と脳内の情報処理に関連性があるだろうか？または、「汎化」は脳内のどの部分で行われているのだろうか。
加えて、ASD の人たちは言葉を 1 回きりの文脈で引きはがしたりしないから、アニメやドラマのセリフや教科書の文章をそのまま覚えるような傾向があるのはそのためか？

〇健常者と障害者の住み分けについて

（熊谷さんの意見）
目に見える身体障害の人　→　見た目で分かり、配慮が行われるから社会に飛び込んだ方がいい！
聴覚障害の人　→　アイデンティティーが確立されるまで「仲間」といた方がよい？
（ただし、ずっと聴覚障害の人のコミュニティーだけに生きていけるわけでもなく、住み分けすればいいということではない）

・だから、住み分けに関しては次の２点がポイントになるのでは？
●住み分けて、「仲間」と自分を知る研究的な場　→　自分がどういう人間かを知る機会を作る
●多数派の社会を変える運動的な実践　→　社会に「配慮してくれる」よう促す機会をつくる

・ASD のよくある症状であるフラッシュバック、グルグル思考についても当事者研究により減少する例がある
フラッシュバック：本人の意図に反して思い出す
グルグル思考：嫌な思い出をパッと思い出して犯人探しをしてしまう

（私見）住み分けに関してのポイントは ASD に限ったことではないであろう。薬物依存、アルコール依存、ギャンブル依存等の依存症、うつ病、不安障害等の精神病、DV する/される者、様々な社会問題を引き起こしている状況に関して、当事者に全ての責任を押し付けて終わるのではなく、当事者に自己理解の土壌を与えながら、社会でも彼らを受け入れる体制を作るなどの工夫が求められるのではないだろうか。そうした意味で、アルコールアノニマス、ナルコッティクスアノニマス、リワークセンターでの活動は非常に有意義なものであると思われる。また、有意義にするためには、自己理解は勿論のこと、相手や社会にどのような部分は援助を受けなければならないかを研究し、それらを実現するための方法を確立していくことを意識するべきであると思われる。

第１章 「意志」と「責任」の発生

中動態と当事者研究

○熊谷さんの『中動態の世界』に関する感想
・能動/受動のパラダイムで苦しんでいる人を中動態的枠組みへ引き込むテクニックとして当事者研究が使えるのではないか
「…多数派の人々が使っている日常言語というものが、…、一部のマイノリティにとっては自分の経験を解釈したり他人と共有したりするためのツールとして使い勝手の悪いものになっているということです。」
・ASD、依存症の方たちの当事者研究に中動態と関連付けられる主題が発見されるのではないか？
綾屋紗月『自閉スペクトラム症当事者研究』
上岡陽江『ダルク女性ハウス』（依存症の当事者研究）

○中動態について

態（voice）
能動態（active voice）：現代でも使われている
受動態（passive voice）：現代でも使われている
中動態（middle voice）：ある時から行為の分類の仕方が変わり、使われなくなった

・エミール・バンヴェニスト（フランスの言語学者）によると、「この区別を根底に置いているインド＝ヨーロッパ語族の諸言語においても、…新しい文法法則だとわかっています。」
『一般言語学の諸問題』、「動詞の能動態と中動態」より（エミール・バンヴェニスト）
能動態：動詞は主語から出発して言語の外で完遂する過程 ― 主語の外で動詞が行われる
中動態：動詞は主語がその座となるような過程 ― 主語の内で動詞が行われる
→ 主語の「内」か「外」かが問題であって、「する」か「される」かが問題ではない

例）βούλομαι（ブーロマイ、ギリシャ語、中動態）「欲する」
「私」は「欲する」という過程の中にある（「私」の中で、欲望や欲求は働くので、「私」は欲望や欲求が働く場所と考えられる）
例）έραμαι（エマライ、ギリシャ語、中動態）「惚れる」
現代では「惚れる」は受動態で考えるが、本来は単に受け身というわけでもなく、「惚れる」が「私」の中で起こったという中動態の方が上手く説明できる
例）φαίνω（ファイノー、ギリシャ語、中動態）「見せる」
英語の「show」に該当する語であり、①appear（「見せる」が「私」を場所として起こっている）②be shown（受動態）③show myself（再帰表現）の３種類がある

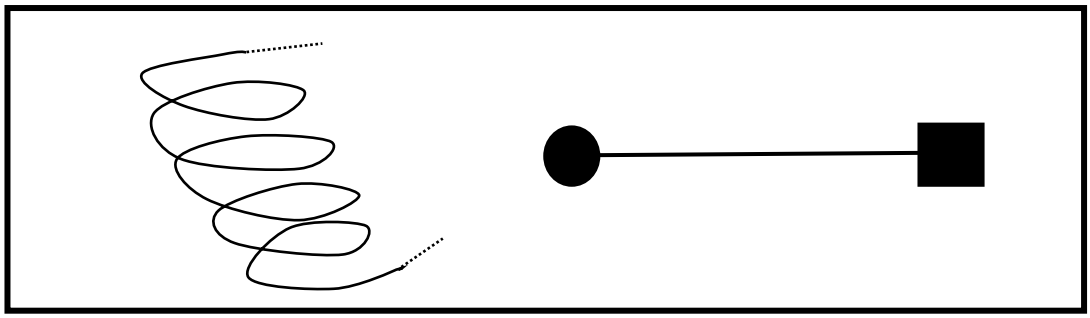
中動態の消失と意志概念の勃興

かつて：能動―中動（受動を含む）の図式
現代：能動―受動（中動が消え去った）の図式
直前の $\varphi\alpha\acute{\iota}\nu\varpi$ に関して再び注目すると、現代では①は能動態、②は受動態である
→ ①「自分で現れているのか」（能動態）②「現れることを誰かに強制されているのか」（受動態）をはっきりさせようとする
→ どこかの時点で「行為における意志」を問題にするようになったからではないか？

國分さんの仮説「中動態の消滅と意志概念の勃興には平行性があるのではないか？」
（実際、古代ギリシアには意志の概念が存在しない）

ハンナ・アレント『精神の生活』

・意志の概念を発見したのはキリスト教哲学だ
古代ギリシア哲学：「現在のアジア」的考え方で循環する時間と自然を重要視
キリスト教哲学：「現在のヨーロッパ」的考え方で直線的な時間感覚（始まりと終わりがある）を重要視



・パウロが意志概念の発見者だ（『ローマ人への手紙』律法の箇所に言及して）
「結局、意志が無力なのは、意志の成功を妨げる何か外的なものによるのではなくて、意志が自らに邪魔するからなのである。そして、イエスの場合と同様に、意志が自らを妨害しないところでは、意志はまだ存在していないのである。」
→ 律法を守る意志、その対抗意志があり、葛藤を癒すのは神の恩寵とパウロは考えた
以上からハンナ・アレントは以下のように結論づけた
① 必然/強制に関係なく Yes/No が言える
② その能力が人間のやろうとすることを決定するかもしれない、とパウロは考えた

・パウロの概念はアウグスチヌスに継承されていく
アウグスチヌス「「精神は自らが動かされることを意志するまでは動かされない」、意志のみが「われわれの力のうちにあり、意志は自由である」」

○意志信仰の問題点

・行動をパウロの意志で説明すると…

① 同時に対抗意志もあるはずだから、私たちは行為について途方もない重荷を背負うことになる

② 行為の出発点は自分であり、意志に先行する原因は存在しないと考えることになる（＝「切断」）

実際は過去や外界からも影響を受けている

cf)「無からの創造（creation of nothing）」（creatio ex nihilo（ラテン語））

國分さん「僕らは意志信仰のなかにある」（← キリスト教哲学の影響を受けて）

・行為の因果関係はいくらでもさかのぼっていける（先ほどの②）が、現代では意志という概念により因果関係を恣意的に切断している

・責任が問われる場合において「意志」の概念が行為を主体に帰属化させる

cf)ジョルジュ・アガンベン『身体の使用―脱構成的可能態の理論のために』「意志は、西洋文化においては、諸々の行為や所有している技術をあらゆる主体に所属させるのを可能にしている装置である。」

・（行為を行った）意志と（行為をする）選択は、一般的には責任を考えるために混同されることが多いが、切り離して考えるべきなのではないか

意志：心のなかに感じるもの

選択：現実の行為

○責任について

・責任（responsibility）は「応答（response）」することで「義の心」に近いのでは？

「義をみてせざるは勇なきなり（人の道として当然行うべきと知りながらしないのは、勇気がないということだ）」（『論語』より）

・責任は本人が感じるものであって、他人から押し付けられるものではないのでは？

國分さん「意志論の責任は堕落していないか？」

cf）ドゥルーズ『フランシス・ベーコン―感覚の論理学』

「われわれは何かに対ついて責任を負うことはできないのであって、何かを前にして、われわれは責任を感じる存在になるのである」

（私見）古代ギリシア哲学とキリスト教哲学の対比構造はニーチェも論じていたような気がする。さらに、それによってニーチェは循環する生へと結論づいた覚えがある。また、因果関係を恣意的に切断している、などはデイビッド・ヒュームが因果論を否定しているときに同じような違和感からそのように結論付けたのであろうか。意志は上級者（所有する、しないを自分で決められる権力がある）にとっては都合のいい理論になりはしないだろうか？（所有をはっきりさせる概念であるから）

傷と退屈の関連性

○『暇と退屈の倫理学』における「退屈」と「傷」の関連性
上岡陽江さん
・地獄の苦しみである「退屈」をしのぐため、「気晴らし」で喧嘩や薬物で自らを高ぶらせる
・非行少年の薬物使用の理由は『暇だったから』
熊谷さん
「傷」と「退屈」に関する関連性を見出した cf）『痛みから始める当事者研究』
國分さん
「「退屈」はたいへんなもので、それがしのげられるのならば、人間は何でもやる、とパスカルが指摘」

○予測誤差
・人間は複数の経験をする中で、パターンや規則性を学習していく（＝図式化する）
・図式化されたことから導いた予測と、現実の誤差を予測誤差という
・人間は予測誤差を減らすように行動する、と期待される
・しかし、実際は予測誤差を取りに行くようなこと（＝「退屈しのぎ」）をする cf)ダークループ・プロブレム
・ASD の場合は予測誤差への過敏が大きいと考えられるのでは？
・トラウマというのは強い予測誤差が生じた状態と説明できる

予測可能 … 「反復されている」事象
予測誤差 … １回性のエピソード記憶の形式をとる

・予測誤差の記憶をトラウマにしないためには当事者研究が必要なのでは？
（「私」ひとりでは１回性だが、類似したエピソードをしている他者の話によって得られる経験が予測可能な事象に昇華させるのでは？）
・薬物/アルコールの使用によって予測誤差の知覚によって高められた覚醒度を下げている？
・さらに薬物/アルコールで得られる知覚は、反復されたもので予測可能になるので、エスカレートせざるをえなくなる？

まとめると…
退屈なときは危険！！（過去の傷ついた記憶を思い出しかねないから）
→ 記憶を思い出ししないように、別の予測誤差の知覚を得ようとする（＝「気晴らし」）
「退屈というのは、古傷の疼きの別名ではないだろうか。」

○Human Nature と Human Fate
Human Nature：傷を得る前から生まれながらに備わっている身体の特徴や傾向
↓傷つく経験をすることで…
Human Fate：運命に基づく人間の性質や行動

・Human Nature だけでは人が愚かな「気晴らし」にのめり込む説明ができない
・Human Fate（”少し悲しい運命”）が例外なく全ての人に課せられていて、それを拭う/忘れるために人は「気晴らし」に走るのではないか？
・以上のように考えることで、退屈に対する耐性に個人差があることを説明できるのでは？（Human Fate は人によって違うから）

○依存症と中動態
依存症＝痛む過去を切断しようとする身振り？
・過去は地獄だから、切断してそれ以上遡れない状態にしたい、今を出発点にしたい
・現実や未来を「無から創造」したい

上岡陽江さんの「ダルク女性ハウス」などで採用されている AA12 ステップ
ステップ 1「私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなったことを認めた。」
・意志を持って、能動的に自分の人生をコントロールしていくという、これまでのライフスタイルから降りることが回復への入り口である（中動態で考えるようにする）
・能動/受動の対立にしばられることこそが依存症の中核にあるという認識と自覚をもつところから始める（能動的に依存行為をしてしまった、という観点に立てば、その過去をふりはらうために依存行為をすることを助長してしまう）

（私見）予測誤差と精神障害には関係がありそうだ、ということは既に『感情とはそもそも何なのか』で分かり始めている。精神障害に限らず、依存行為にも同じことがいえるかもしれない。また、Human Fate はニーチェのいう「ディオニソス的」なもの、岡田斗司夫、ベルセルク、まどかマギカで論じられているような「世界は基本的に残酷なものである」という考え方にも通じるかもしれない。さらに、自己啓発本で掲げている未来志向は正に過去の切断であって、多くの社会人が依存してしまう理由がよくわかる（「過去」を切断して、今を出発点として誰も考えたいのである。）そうした意味で過去を引き受けるということがいかに苦しく、困難なものか！

中動態とアフォーダンス（ASD 当事者研究での用語）

○非自発的同意

・同意は自発性と結びついているようで、必ずしも自発性を前提としていない

例）「カツアゲ」行為をする方、される方で考えたとき…

「カツアゲ」した方　→　能動的行為

「カツアゲ」された方　→　金を渡したのは能動的行為？受動的行為？　→　中動態的行為

「カツアゲ」されて金を渡す行為は、同意はしているが、自発的な行為ではない！

→「非自発的同意」と呼ぶことができる

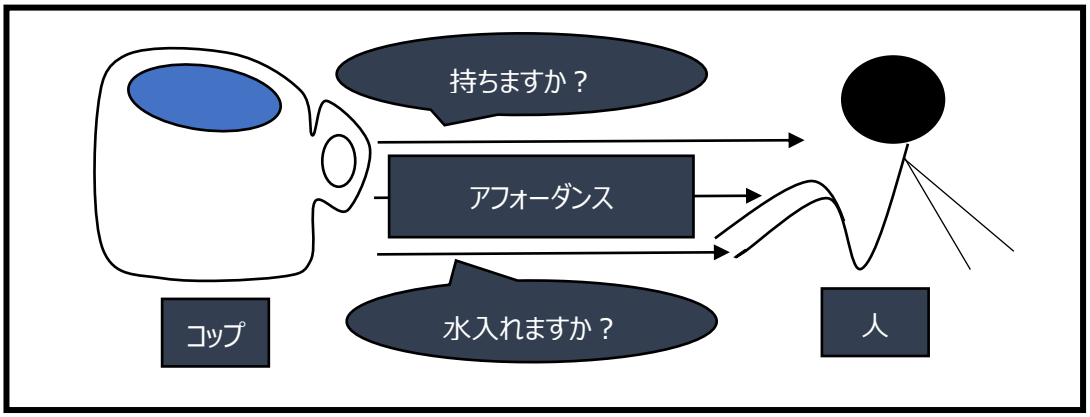
・意志―選択、同意―自発性は同じ関係がある

cf)アレントは同意を自発的なものであることを前提として、権力を同意によって定義しているが、國分さんはこれを批判している

cf)フーコーは、暴力は「身体に直接働きかける」、権力は「行為に直接働きかける」と定義した

○アフォーダンス　―『中動態の世界』における非自発的同意に通ずるもの

綾屋さん「アフォーダンスの配置によって支えられる自己―ある自閉症スペクトラム当事者の視点より」



存在そのもの（上ではコップ）が「ある種の行為を促してくる」、これを afford（与える、提供する）になぞらえて、アフォーダンスということにしている

綾屋さん「私は他の人より意志が立ち上がりにくい」

・身体の内側や外側から大量のアフォーダンスがやってきて、それらを民主的に合意して 1 つの自分の意志としてまとめるのに時間がかかる

・選択や行為を、身体内外から非自発的同意を強いられた結果として捉えており、その意味で中動態を生き続けている

・アフォーダンスの洪水の中に身を置くこと（＝中動態のみ生きること）は楽でない

・中動態の生き方が楽ではないから、人は「傷だらけになる」にもかかわらず、能動/受動の世界を求める？（単に責任を他人に帰属したいだけ、というわけではなくて）

○スピノザの思想と中動態
※スピノザ自身が中動態について言及しているわけではない

スピノザの自由：みずからを貫く必然的な法則に基づいて、その本質を十分に表現できること
└──「自己感」
・「自己感」を理解することが当事者研究
・「自己感」は外部からの刺激に対し、自閉的/内向的に変状（affectitur）する
スピノザの真理：体験の対象であって、客観的に存在しているものではない
←→ デカルトの真理（客観的で、誰もがたどり着けるのが真理）
・スピノザ哲学は中動態的なプロセスを生きており、人が自由になる方法を考えている
コナトゥス：生体が自分のまとまりを維持しようとする力
・コナトゥスは生体の恒常性維持機能（ホメオスタシス）と同じなのではないか、と熊谷さんは指摘
・内側のアフォーダンスはコナトゥスであり、外部からの刺激（外側から強いられる多数派向けの欲望や規範）はコナトゥスではない

○ハイデガーの意志に対する見方
意志することは始まりであろうとすることである → 無からの創造
意志することは忘れようとすることである → 過去を切断して、自分の一部分を否定すること
意志することは考えまいとすることである → 理由の一つの過去を無視して、始まりとする今だけを見る
意志することは憎むことである → 生きている現在というのはどうにもならない（過去に規定されている）から、過去を前にして人はそれに復讐したいと考える
覚悟は意志とは異なり、現在/過去/未来を引き受けることである

○誰かと一緒にいたいのはなぜ？
ジョン・ロック「家族制度は自然」vs ジャン・ジャック・ルソー「１夜を共にした男女が一緒にいるのは自然ではない」
ポイントは、ルソーが前提とした自然人/自然状態は虚構であり、これを國分さんは Human Nature と呼ぶことにした → 寂しさは Human Fate から来るものではないか？

（私見）中動態の生き方が楽ではないのは、自分の人生を自分で決定することができない、支配できない辛さがある、ことを認めてしまうことに繋がるからなのではないか。メルロ＝ポンティも行動は変えることができる、成長することができる、という論に立っていたように思うが、こうした思想がなければ、私たちは生に服従されることを認めなければいけなくなる。意志についても同様にいえまいか。意志にして、行為を自分の責任として引き受けることは、行動の結果も自分で支配できるとする希望的観測から生まれるような感じもある。とにもかくにもバランスが重要であるとは思うが。禅にも、正受/不受という言葉がある。過去で一杯になると動けなくなってしまう。だから、都度自分を否定して（考えずに、意志でもって）前に進んで行かなければならないということもあるかもしれない。

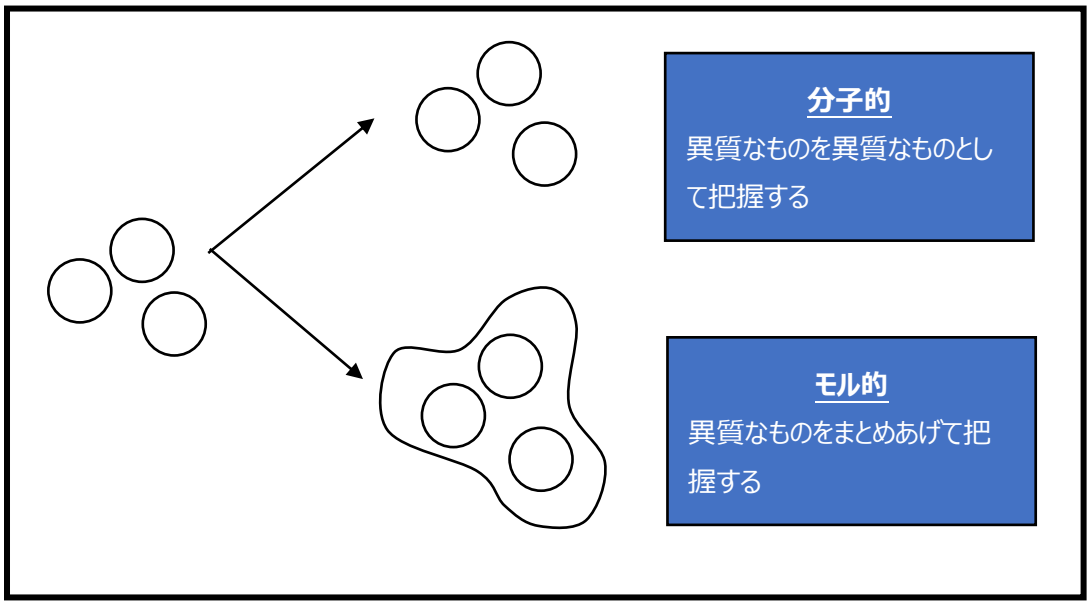
第２章　中動態と「主体」の生成

発達障害、健常者の意志の違い

○スピノザ「自由意志というものは存在しない」
（行為の原因はいくらでも遡ることができる）
・上岡陽江さんによると、薬物依存者は過去を忘れたくて/切断したくて薬物を使っている
・未来志向も薬物と同じ作用であり、ハイデガー的には「考えるな、考えるな」と言っていることと同じ
・スピノザは「自由意志は存在しない」としているが、「意志を感じる」としている

○「意思決定支援」
・「意思決定支援」「インフォームド・コンセント」は相手に責任を押し付ける手段となりつつある
※「インフォームド・コンセント」は「～の治療法があります。それを選択するあなたの意志を尊重します。」というもので、アメリカでは医師の訴訟逃れの手段になりつつあり社会問題化している
・パターナリズムを否定することで生まれた意思決定支援を単に否定することはできないが、問題はパターナリズムがもたらした「排除」を反省するときに「意志」の概念を持ち出してしまったこと
・「意思決定」ではなく、「欲望形成（医師や本人、周りの人を含めて「～したい」を形成していく）」にしてはどうか、と國分さん

○分子的、モル的（ドゥルーズ＆ガタリ）



・綾屋さん（ASD）は分子的に理解しているのでは？
・「お腹が空いた」というのは、あらゆる内臓からの情報や、外部からの情報をまとめたモル的な情報
・欲望は様々な要望をモル的に理解するものであって、意思決定では決定に関係しない要望を無視する

○「したい性」と「します性」
綾屋さんの意志のモデルは「意志とは皮膚の内外からの情報（アフォーダンス）を無理やりまとめあげたもの」であることを前提として下記のようにわかれている

「したい性」：モル的な「意志」
「します性」：あらかじめ規則を決めておく「切断戦略」（＝内外の情報をシャットアウトする）

また、綾屋さんは「健常者は内外の情報を自然に（意識せず、うっかり）一部を切断してまとめ上げている」と表現している

例）「お腹すいた」
とんかつが目の前にある
とんかつの香ばしい香りがする
前に食べたラーメン屋さんも横にある
胃は重たい
喉が渇いている
こってりしたものが食べたい
昨日こってりしたものを食べたのを思い出した

分子的
異質なものを異質なものとして把握する

以上を自然にまとめ上げて…
とんかつ食べたい →

モル的
異質なものをまとめあげて把握する

・綾屋さんによると綾屋さんは「情報のまとめ上げ」がゆっくりで、これを解決する手段として「～します性」を採用している（～時になったら～します、～を見たら～します）
・「します性」は健常者から見るとこだわりが強い（ASD の特徴）ように見える

○発達障害と現象学
フッサールは発達障害？
―村上靖彦「フッサールの間主観性の議論が発達障害をもつ人々の対人関係のあり方に似ている」
―國分功一郎「時間の生成についてあり得ないほど細かく記述している」
ドゥルーズは発達障害？
―ドゥルーズの他者論は他者というものが自分のなかに内面化される以前について語ったものだが、それを意識的に理論化できたのは、ドゥルーズが発達障害だったからでは？
綾屋さん「高解像度」
―知覚を「うっかり」まとめあげてしまうことができないことを言ったもので、普通の人には思いつかない表現

現象学と自閉症の研究を関連して見てみると…

・他者の現象学　―　従来の医学的な自閉症研究/村上靖彦

→ 「視線触発」を受け取れないのが発達障害で他者との関係における障害をベースにそれ以外について論じる

・自己の現象学　―　ASD に関する熊谷さんや綾屋さんの当事者研究

→　他者との関係における障害はあくまで結果であって、その要因は健常者と自閉症者の「解像度の違い」であると考える（村上靖彦の考え方とは原因と結果が逆）

→　考え方の背景には、熊谷さんや綾屋さんが包摂的な社会/共生社会を目指していることがある

・「コミュニケーションにおける障害とは、二者の間に生ずるずれのことであって、その原因を一方に帰すことはできません。」

・「アメリカ人と日本人のコミュニケーションがうまくいかないときに、「日本人はコミュニケーション障害」というのは早合点であろう。」（『発達障害当事者研究』より）

（私見）学問にも他者の現象学で見る学問と、自己の現象学で見る学問の２つがあるように思う。例えば、行動分析学では、強化の理由というものは問わない。既にそうした能力や性質は獲得した者として扱う。いわば、入力値である環境や外部要因、出力値である行動の間にある働きに関してはブラックボックスとする。この強化の理由を問えば、脳内でのドーパミンなどの目に見えない快楽物質などに繋がるであろう。そして、さらにその脳内物質と行動についての関係は進化論に帰すことができるだろう。cf）『スマホ脳』。ところが、こうして得られた「客観的な」（と形容している時点で、これらは他者の現象学であるが）法則は確かに汎用性が高いものの、全てが全てあてはまるわけではない。だからこそ、マイノリティに注目した社会学、文学や当事者研究といった自己を分析する哲学が必要になるのかもしれない。

予測符号化理論（Predictive Cording Theory）

ヘルムホルツ「ヘルムホルツの自由化エネルギー」
↓
フロイト
↓
フリストン：統合失調症、自閉症、そして平均的な人などさまざまな精神現象を「予測符号化」というフレームワークでかんがえることはできないか、と考えた
↓
予測符号化理論と熊谷さんたちの当事者研究が関連づけられて『サイエンス』で紹介された

予測符号化理論：脳は「予測する臓器」「推論する臓器」である
「現在の」感覚体験と「過去の」感覚体験を比較し、共通するカテゴリーを抽出して、「未来」の感覚体験についての予測を与えることで、脳は時間を生み出す

・実際に起こった現実と「未来」の感覚体験についての予測の差が予測誤差
・また、予測誤差には個人差があると考えられている
健常者：多少外れていても問題はないと考える
ASD：問題なしと考えられる予測誤差のレンジが低い

（１） 予測誤差が許容できる範囲を超えていたら…
① 「知覚」―予測のアップデートを行う
② 「行動」―予測誤差を減らすために「世界を支配」する
（２） 予測誤差がある一定ラインを超えると、もうスルーできなくなる
この一定ラインに個人差があり、このパラメーターで ASD を定義できるのではないかと考えた
同じ経験でも、普通の人が「あ、前に経験した、だから説明できる」と認識するところを ASD の人は「はじめてだ！」と認識する、ということ
この一定ラインはカントの「想像力」（存在しないものを存在させることができる能力）と関連があるのではないか、と國分さんは指摘

cf)ドゥルーズの鐘の音（カーン、カーン、カーン、…）
鐘は打たれるたびに反復は崩壊しており、反復していると思うには受け取る主体の中で何らかの「ジャンプ」（想像力？存在しないものを存在させる力）がないといけない
「他者の現象学だとどうしても図式化作用をすでに獲得した主体が想定されてしまう。そうではなくて、図式化はどうやって可能になるのかを考えなければならないのではないか。」

「図式化」と「他者」

○カントが挙げた人間の能力
感性：受け取る能力（受動性）
↓想像力（Einbildungskraft 構成力）：存在していないものを存在させる能力
悟性：概念を使って能動的に理解する能力（能動性）

人間は想像力で「図式化」を行っている

○「他者」ってそんなに偉いのか？
・他者の現象学での自閉症論はラレンやレヴィナスが起源で、人間の図式化には他者が重要としている
・一方で、胎児は「他者」（意志/視線をもっている）との接触前から「図式化」を行っていることがわかっており、胎児のときから多数派、少数派それぞれの図式化が存在していることを示している
・とはいえ、自己の現象学での自閉症論においても、「他者」との出会いにより図式化が精緻化することを否定してはいないことに注意する
例）指しゃべり

○予測と期待
予測：こうなるだろう
期待：こうなってほしい（願望）

熊谷さん「乳児はおそらく、何かしらの期待を持っているのではないか。そして、経験を重ねるにつれて、予測が増え、パターンを学習していく。そうすると、コナトゥス＝期待も拡張していく。最初のうちは少し期待していただけなのに、因果関係を学習して、世の中や世界の仕組みを知るようになると、あれもこれも期待をしはじめる。」

・コナトゥス（＝個体の本質としての力）があり、それは何らかの期待を含んでいる
・コナトゥスがある閾値を超えると、想像力とでも呼ぶべき能力が発生する？
・一般的に人間は受容性のイメージがあるが、コナトゥス（自分のまとまりを維持しようとする力）で考えると外的な刺激を受けることで「変状」するし、「欲動」も生まれる
・アントニオ・ダマシオは「行為は「目的を設定した運動」」と定義している

（私見）熊谷さんの期待に関する発言は大きな示唆に富んでいないか？人間が期待を持つのは様々な経験によって自身の中に因果関係を作ったからであり、その因果関係が世の中に遭わないときは期待が必ずしも叶わないということも表現しているように思われる。また、スピノザの「変状」や「欲動」に関する指摘で分かるように、人間は単なる器でなくて、形が変わり続ける器であるということである。脳には可塑性があるといわれているが、この「変状」と関係があることかもしれない。

第３章　自己感・他者・社会

コナトゥスは本来自己を維持しようとする力だが、単に従うだけだと自己を維持することが難しい場合もある？（特に２つめ、３つめの例は嫌な過去を忘れる（慣れる）ためにコナトゥスが働いて、何度も反復が行われるものの、その反復のために苦痛を感じている例である。なお、２つめの例に関しては刺激の場面を繰り返すことで慣れようとしているのではないかということをフロイトも指摘している。（壊れた心的装置の修復））

例）生活習慣病：夜にラーメンをついつい食べてしまう

例）PTSD（心的外傷後ストレス障害）

例）薬物依存

ドゥルーズ「私は抑圧するがゆえに反復するのではない。私は反復するから抑圧するのであり、私は、反復するがゆえに忘却するのである。」

↓

ダルク女性ハウスの人たち「原理は分かるけど、何度も反復してしまうし、いつまでたっても忘れられない。」

↓

「私」そのものの根拠はコナトゥスである、では説明できない事象もある。

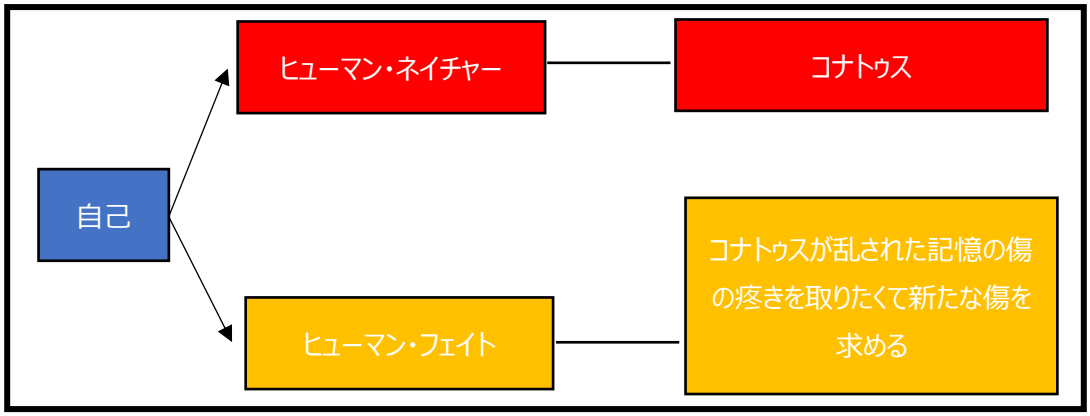
時には、自己を保つためにコナトゥスを裏切ることも必要なのでは？

実際、コナトゥスだけが原理であれば、衣食住が足りていればそれで OK なはず。

→「退屈」という感情はあり得ないし、外に出て傷だらけになる必要もない

cf）パスカル「部屋にじっとしていられないから、人間は不幸を招く」

cf）國分功一郎『暇と退屈の倫理学』



cf)熊谷さん「痛みから始まる当事者研究」

過去のトラウマ的記憶を消すには新たなトラウマになるような傷を自分に与えるのが一番

（自傷、依存症、摂食障害、…）

→　覚醒度を上げる何らかの方法で過去の記憶を沈静化させる？

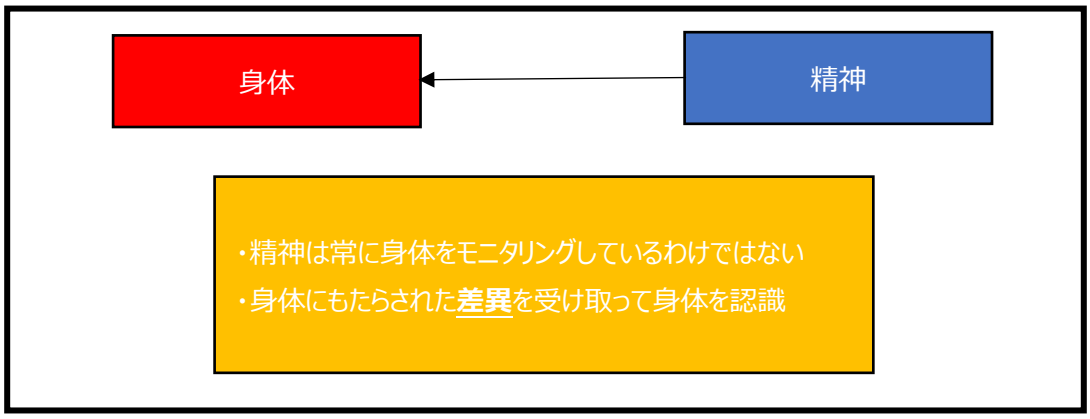
○浪費と消費

浪費：物を受け取り、味わうことができ、満腹感が得られる
消費：物を受け取っていない
（上記定義は cf）國分功一郎『暇と退屈の倫理学』）

例）過食は「消費」
→ 過食では食べ物の情報そのものを受け取っておらず（味わっていない）、インプットというよりアウトプットに近い（過食は栄養分がとるのが目的ではなく、口に物を入れて胃を荒らすことが目的でさながらスポーツのようである）
→ 熊谷さん自身が過食してしまうことが多いようで、本人曰く「過食は「カロリーの高いどぎついものを食べている」という観念を食べている。」

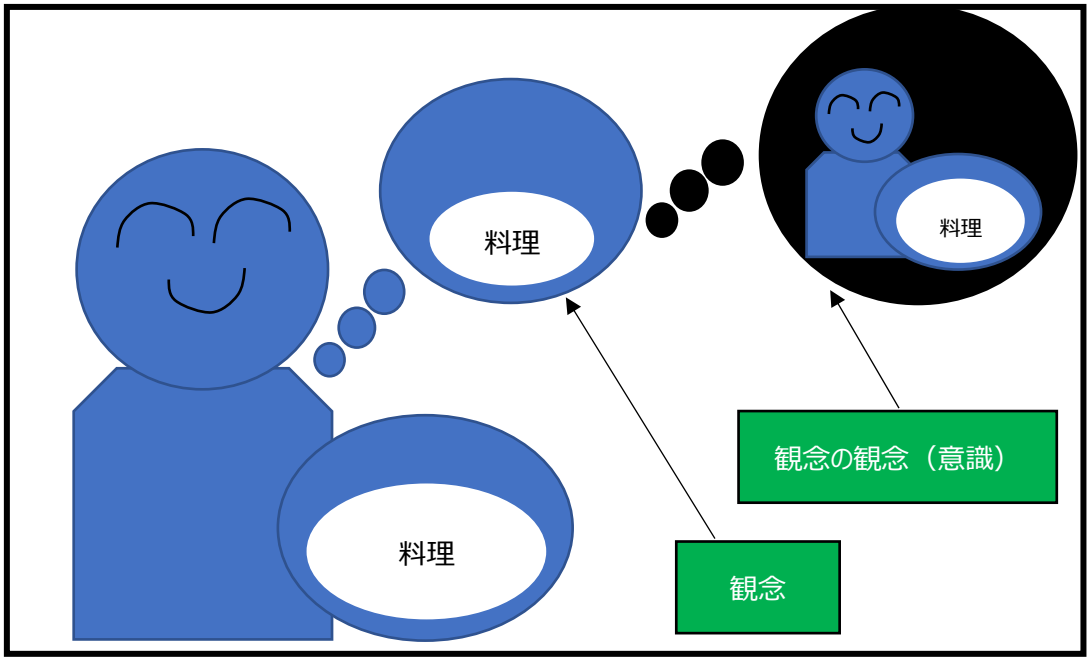
○精神と身体の関係

精神と身体に関するスピノザの言及
「人間精神を構成する観念の対象は身体である。」
「人間精神は人間身体を認識しない。」
「人間精神は身体が受ける刺激[変状]」の観念によってのみ人間身体自身を認識し、またそれの存在することを知る。」



「すると、人間の意識というものは、身体に起こせるさまざまな結果だけを受け取っていて、その意味で二次的なものだということになります。意識がまずあるのではない。身体に生じる差異が意識を生み出すのです。」

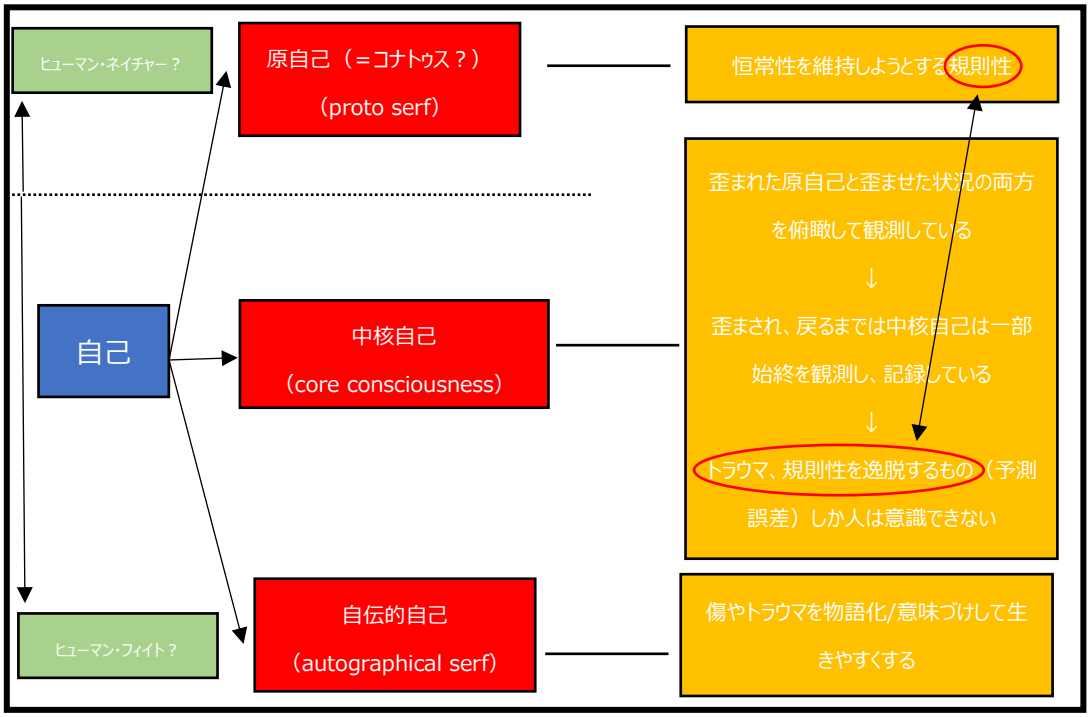
スピノザにとって意識とは「観念の観念」（ラテン語：idea ideae）



アントニオ・ダマシオはスピノザに影響を受けた脳科学者

『感じる脳　情動と感情の脳科学―よみがえるスピノザ』

LOOKING FOR SPINOZA



・毎回、中核自己が発生するわけではない＝意識に上るわけではない

・綾屋さんの仮説によると、ASD の人は意識に上る閾値が低い＝簡単に意識が起動する

・綾屋さんによると、自伝的自己になるきっかけとして他者が必要　←　ドゥルーズ的

自己を認識するために必要な他者の存在

〇自伝的自己＝「統覚」？（”Ich denke.（イッケデンケ）”（I Think.））

「これらを考えているのは私である」という表象がないと、認識が成り立たない
↑
松本卓也さん
”Ich denke.”がないと、頭の中の諸々の概念がすべて自分のものと思えなくなるからだ
→　思えていない状態が統合失調症（自分の頭の中で別の人が考えているように感じること）

・自伝的自己の発生は他者が必要
例）ドゥルーズの無人島論
建物を見たときに奥行きが想像できるのは、他者が私の代わりにそれを見て経験してくれているという感覚があるからで、無人島では「見えていない」もの（「自己」も含まれる）は想像できない
例）フランス語ができない人がストランブールに留学した話（インターネットも発達していない状態）
「世界がね、家とバス停と語学学校だけになるんだ。他に何も存在しなくなってしまうんだ。」

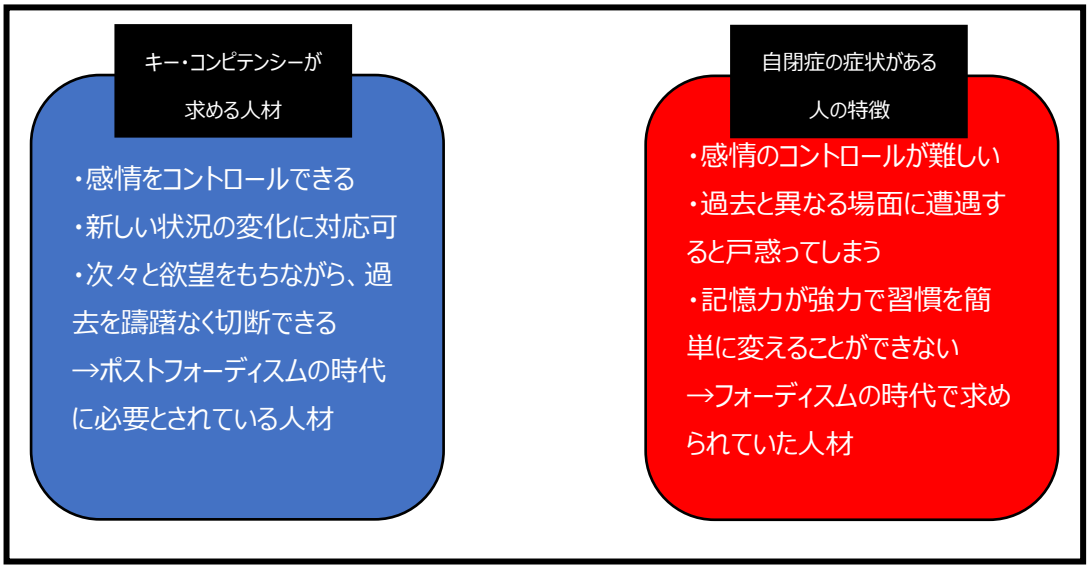
・大澤真幸「社会性の起源」―霊長類を大きく参照している
▽たったひとりで育てられたチンパンジーは鏡による自己認識ができない
→　他者の存在は自己認識と関わる？
▽ガラス越しに他のチンパンジーが見える環境で育っても鏡による自己認識ができなかった
→　他者は触れ合うなどしてはじめて他者として機能する？単に見ているだけではダメ？

・綾屋さんの他者が現れる段階には５段階ある
▽綾屋さんは当事者研究によって意識のレンジが似た仲間と出会えた
「そういうことってあるよね。」「たしかに世の中そうなってるよね。」「あなたってそうだよね。」
→　似た仲間とのコミュニケーションによって自伝的な記憶が整理された
▽以上の例からわかるように「他者や社会を定数のように扱う他者論は他者や社会の改変の可能性を奪い、医学モデルを導きます。」―色んな他者や社会があり、ひとくくりに扱うことはできない
▽中核自己は他者との関わりにより、自伝的自己になり、自伝的自己をもつと自己感をもって生きていくことができる

（私見）ドゥルーズの無人島論は脳科学的にはミラーニューロンの必要性を言っていることにならないか。ガラス越しの環境で育ったチンパンジーから、ミラーニューロンは単に見ているだけでは育たなくて接触がないと上手く生育/機能しないことが予想できる。この仮説に立つと、インターネットによる非接触コミュニケーションは、ミラーニューロンを衰退化させてしまう危機を孕んでいる。なお、コロナ禍における非接触コミュニケーションでストレスが増大したことも同様にミラーニューロンで説明できるかもしれない。また、綾屋さんの似た仲間とのコミュニケーションによって自伝的な記憶が整理され安定された事例はアルコール・アノニマスなどの当事者研究の効果の裏付けになると同時に、発達障害/うつ病/統合失調症は周りに似た人間をみつけにくい分、精神は不安定になりやすいのではないかと考えた。

「キー・コンピテンシー」と自閉症

キー・コンピテンシー：OECD（経済協力開発機構）が示しているもので、「単なる知識や能力だけでなく、技能や態度をも含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈のなかで複雑な要求（課題）に対応することができる力」と定義されており、国際学習到達度調査の枠組みとなっており、以下を具体的に指す
・社会・文化的・技術ツールを相互作用的に活用する能力
・多様な社会グループにおける人間関係の形成能力
・自律的に行動する能力
→　変化・複雑性・相互依存に特徴づけられる世界への対応力が必要
→　相手の立場に立ち、みずからが所属する社会や文化を相対して自主的な判断を行える能力が求められている（これは個人が備えるべき資質として経済合理性の下で公認されつつある）
→　都合の悪いことや過去を切断してフレキシブルに対応できる人間（＋α：前向きで未来志向的な物語化を行える人）を想定している
→「いかなる感情も操作し、過去を切断しながら未来志向で生きていく労働者」（國分さん曰く、「ランボーみたい」）…そのような人を求めている中で強烈に苦しんでいる人が増加している現代社会（うつ病の蔓延、オピオイド依存）



・キー・コンピテンシーが称揚される社会では、それに対応できない人たちが排除されていくのではないか
・ASD の診断数が 30 倍になっている
昔なら「ちょっと変わっているかもね」で済んだ子供たちを親が診断に連れていく
※過去と同じ診断基準で行うと数が増えていないという事実からわかるように、過去に比べて受診する人や気にする人が増えた

・一方で、キー・コンピテンシーはパターナリズムの否定から生まれている側面もあるため、簡単に全否定はできない（80 年代のパターナリズムから解放される社会運動の中で熊谷さんのような身体障害者が能動的に生きられるようになった、という事実もあるため）
→ とはいえ、キー・コンピテンシーの考え方は過度に個人化した社会を生み出しているのかもしれない

・キー・コンピテンシーが求められる現代では反中動的な個人が求められる
「意志」によって過去を切断する
・『不安な経済/漂流する個人』（リチャード・セネット）
「みずからの人生の物語を即興でつむぎだすか、あるいは、一貫した自己感覚ぬきの状態に甘んじなければならない。」

・自閉スペクトラム症は中動態を生きているが、「中動態を生きるということは決して楽ではない。」
現代社会はキー・コンピテンシーを求める社会だから↑

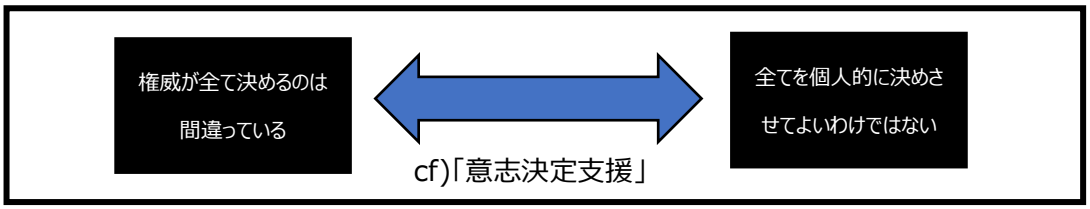
・「ある時代に注目される障害には、その時代の規範のネガみたいなところがある。」

時代	規範	障害
80 年代	パターナリズム	車いす、脳性麻痺
現代	キー・コンピテンシー	ASD、自閉症

〇認知行動療法と当事者研究
認知行動療法（Cognitive Behavior Theory）：話す側が変わる運動 ― 能動/受動の図式
当事者研究：圧倒的に聞く側が変わる運動 ― 中動態

平井秀章は『刑務所処遇の社会学』の中で、CBT をネオリベ的秩序および統治のテクノジーとして批判している
・社会の変化の中で「刑務所で罰する」から「CBT によって自己コントロールさせる」という方向にシフトしていったが、下記点において CBT はネオリベラル的といえる
・隔離施設に収容して倫理観や人格を書き換えようとする介入には再犯防止効果がないことがエビデンスをもって証明されたため、この収容や介入にお金を使うのは無駄だとする右派的主張
・彼らは彼らなりの人生があり、そのために反社会的行為せざるを得ない事情があったとする左派的主張
・しかし、CBT で求められる人物像はキー・コンピテンシーと同じで、CBT は基本的に過去を深堀せず、現在や未来に向かう未来志向の人間（慎慮主義）を作り変えようとするテクノロジーと言える
↓
・問題は、刑務所を出た人たちに貧困や差別のような自己コントロールできない社会的な排除に対して、個人で乗り越えようとしているところ
・国の支出をなるべく抑えて、個人の主体性を称揚しながら自己責任として社会的なしわよせを個人にさせている

〇慎慮主義と多様性



今の社会は多様でなければ、人間が敏感でもない
（東浩紀「動物化」、國分功一郎『暇と退屈の倫理学』における消費行動）
→　原因は欲望が瞬間的に満たされてしまうから
例）amazon ですぐ欲しいものが手に届く、スマホで欲しい情報が手に入る

ハイデガー『形而上学の根本諸概念』のミツバチ
おなかに切り目を入れられていて、お腹から蜜がダダ洩れなのに気づかず、延々と蜜を飲み続ける
このミツバチは、「動物化」している私たちと下記点において変わらない
・ある種の傷の否認　―　おなかの傷に気づかない
・過去の参照の放棄　―　どれだけ蜜を飲んだかわからなくなっている
・終わらない労働　―　いつまでも蜜を飲み続ける

「慎慮主義は、他者を尊重せよ、多様性を尊重せよ、といいますが、平井さんによれば、それと共に「多様性を認める―ただし暴れる人以外」というアドバンスド・リベラリズムが蔓延している。そうした狭さが、今の時代の身長主義の基調にある。」

第４章　中動態と「責任」

中動態の主語に関して
Cf)ジョルジュ・アガンベン『身体の使用』
パンヴェニストの中動態の定義について言及して、「主体は動作を支配するのではなく、みずからが動作の起こる場所なのである。」
↓
中動態からは、主体が客体を支配するというのとは違う契機が見いだせるのではないか

さらにアガンベンは下記のように言及
「なにものかとの使用関係に入るためには、わたしはそれ[使用するという動作]の影響を受けなければならず、わたし自身をそれを使用する者として構成しなければならない。」
道具を使うとき、道具に使われている側面、あるいは道具と私が一緒に使用を実現しているという側面もある
例）ペンをもつとき、ペンを握らなければならないし、文字を描いているときは手とペンが一体になっている
例）自転車を使うときは、特殊な使い方で手や足を使わなければならないし、自転車を動かしているときは、身体と自転車が一体となって動いている
例）職人が使用している仕事道具についても同じことが言え、この例では道具は使用する人を選ぶ

では、どこまでが自分で、どこからが自分でないか。→熊谷さん「再現性の最も高いものが自分の身体」
例）赤ちゃんは手が使えないから、赤ちゃんにとって自分の身体とはいえない
例）熊谷さんは車いすを自在に使いこなしているから車いすは自分の身体になっている
例）職人にとって仕事道具は使いこなせるから道具であるから自分の身体になっている

道具を「使う」ことと身体を「使う」ことにさほど差はない
→　アガンベン「自己とは自己の使用以外のなにものでもない。」

プラトン『アルキビアス』におけるソクラテスとアルキビアスの対話にて…
①　使うものと使われるものとは別物である　…　例）刃物と職人
②　作業に使っている眼や手は使われるものである
③　②と同様にして身体は使われるものであるが、①より身体は使うものではない
④　人間は身体、魂、その両方の３説が有力である
⑤　④より人間は使用するものとしての魂である（とプラトンは乗り切った）
ここで、「使用を通じて自己が生まれてくるのであって、自己は自己の使用以外のなにものでもない」という考えが出てくる分岐もあり得た、と國分さんは指摘している

ジャック・デリダ
「おそらく哲学は、このような中動態、すなわちある種の非―他動性をまず能動態と受動態へ振り分け、それを抑圧することで自らを構成したのである。」
→　先ほどの例で、プラトンは能動態と受動態へ振り分けるために「魂」という概念を持ち出した、と國分さんは指摘

使用と支配の関係

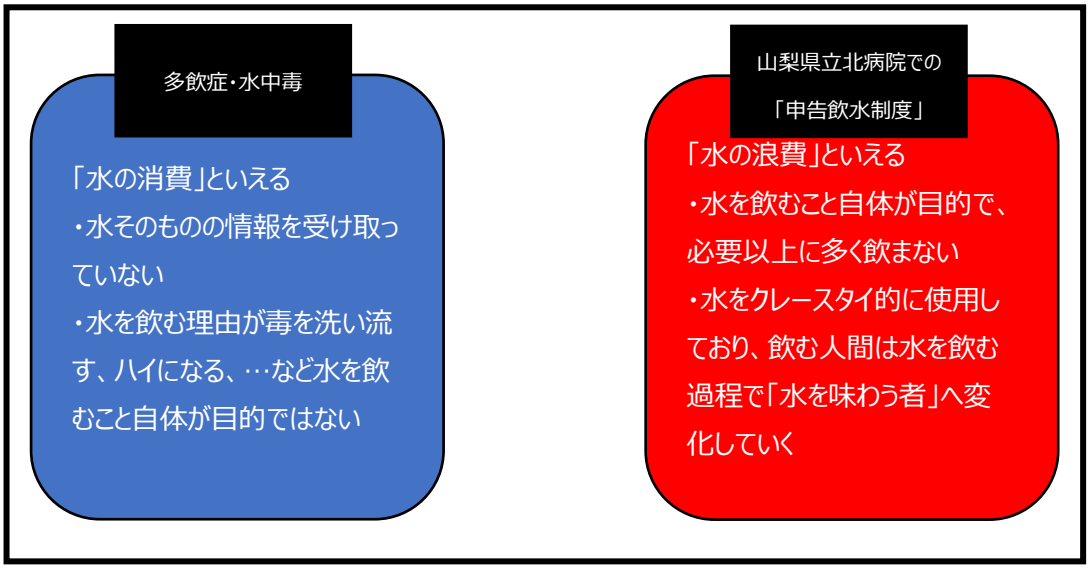
〇ギリシア語の文法から見る「使用」について
$\chi\rho\acute{\eta}\sigma\theta\alpha\iota$（クレースタイ、ギリシャ語、中動態）「使う」の直接目的語は予格や属格をとる
←→　他のギリシア語は直接目的語は対格をとる
予格：I give you money.
属格：Koichiro's restaurant
格変化がなくなって前置詞が生まれてきた
↓
$\chi\rho\acute{\eta}\sigma\theta\alpha\iota$ は単に「～を使う」という意味ではない！そこからわかることとして…
・一般的には"使用＝支配"だが、ギリシア語では違う解釈なのでは？
・「使うためには使う主体にならねばならない。」
・「クレースタイを通じて主体と客体の１つの組み合わさった何か、自己のようなものが構成されると考えねばならないのではないか。」

英語でも…
use：使用　→　先ほどギリシア語の「クレータイ」で表現されるような通常の「使用」
abuse：「誤」＋「使用」、依存、嗜癖、虐待　→　プラトンが考えている「使用」では？
※"ab"は"abnormal"からわかるように否定の意味がある接頭語

〇支配しようとするとうまく使用できない
・熊谷さん『リハビリの夜』を執筆中に感じたこと
「自分の身体をプラトン的に使おうとすると、身体が動かなくなる。」
「…、身を委ねるといいますか、湧き起こってくるボトムアップの動きに沿わせていく感覚がないと、身体というのは動きづらいものなのではないでしょうか。」

・山梨県立北病院の「申告飲水制度」
多飲症：主に水を多量に飲んでしまう症状（数分間で 10ℓ…）
水中毒：多飲症により、水が身体に一気に流れ込み、脳がむくみ、呼吸が止まったり、けいれんを起こしたりする症状

精神科病棟の患者に多飲症や水中毒が多く、問題だった
↓
山梨県立北病院「申告飲水制度」を導入した
① 水を飲むときは「これから水を飲みます」と申告してもらう
② 「申告飲水制度」を導入すると、水中毒が減少した



「支配しようとしたり、コントロールしたりしようとするとうまくいかない」
「身体が今どのような状態なのかということに聞き耳を立てるように、いわば湧き起こってくる動きをすくい上げていくような感覚がないといけない」

（私見）身体を自在に動かすために「支配」しようとすると上手くいかなかったり、「聞き耳を立てる」ようにしてすくい上げる必要があったりするのは禅の考え方に通ずる。無理をしない、直観に従うということになると思う。そして、なぜ直観が必要なのか。それは、論理的な思考は一部分に選択したものであるが、直観や感情というものは多大な情報を脳が処理してできた「モル」的な結論であるから、ではないだろうか。余談ではあるが、私も何らかの計算を行っているときなどは直感的に計算している。人によっては右脳的に計算する、などと表現している人もいるが、計算式などを見るだけで筆算や検算をしなくても答えがわかってしまう。これは脳に蓄えられた膨大な情報が「モル」的にまとめ上げられ答えを出しているのかもしれない。

責任について

〇介護者、障害者の歴史
介護者が偉い時代 … 70 年代
↓
障害者が偉い時代 … 80 年代「介護者手足論」
↓
バランスが大事だよね … 現代
↓
熊谷さん「いや、それも違うのでは？」

熊谷さんによると、「介護者手足論」者の介護者が使い勝手がいいわけではない
・「自分から動かない」
・「徹底した指示待ちスタンス」

「魂」がいちいち指示していたら身体が動かないのは科学的にも証明されている
cf）「協応構造」：勝手に身体の方で色々調整してくれている

※アガンベン『身体の使用』はアリストテレス『政治学』奴隷の本性の定義から来ていることもあり、奴隷制から話が始まっていることに注意しなければならない

主権：自分（たち）のことは自分（たち）で決める　例）イギリスの EU 離脱
→　主権を重視して多文化主義になり、内政干渉を許さない現代の社会の流れ…
→　依存症などの問題を抱えている人は本人の意志を過信しないところから始めるべき
（依存症の人は、過去の人間関係に恵まれておらず、自分を守ろうとする（＝内政干渉を拒否する？）ので、AA12 ステップの最初に過剰な自己統括をゆるめる段階がある）

（私見）「介護者手足論」者の介護者が「徹底した指示待ちスタンス」であることは興味深い。これは介護者に限ったことではないと思われる。例えば、ユトリ世代やサトリ世代が「指示待ちスタンス」であることとも関連があるのではないか。対する相手のことを尊重するがあまり、自分から積極的に動かない。対する相手のことを尊重する理由には様々考えられるが、たとえば怒られることに慣れていない、というのが挙げられる。また、子供からの受験勉強や詰込み教育のせいで「遊び」不足や「自由」不足が起こり、親から「使用」ではなく、「支配」されたことで他者との関係について、「支配」「被支配」を軸としてしか見られなくなっていることがあるかもしれない。他にも「お前も尊重するから自分も尊重してくれ」というスタンスが、個人化が進む中で生まれてきているということも要因かもしれない。有能であったり誠実な態度であったりするにも関わらず、「使い勝手」が悪いというのは何とも不経済な現象が起きているといえよう。

〇「良きサマリア人の譬」
・みぐるみ剥がされて、瀕死の状態で横たわる人
・司祭、レビ人は徹が、何もしない
・サマリア人は旅人を介抱し、宿に連れていき宿代まで払う

律法学者「私の隣人は誰ですか。」
イエス「この（３人の）うち、誰が旅人の隣人になったと思うか。」

☆「である」ではなく、「になる」（ドゥルーズの「becoming」（生成変化）に通づる？）

熊谷さん
・依存症とは、能動/受動、やる/やられるの図式や「abuse」状態（身体を支配するものと考えている）に人一倍からめられた状態

・AA12 ステップは「becoming」の系列になっている
ステップ２＆３：「自分を超えた力」「神」が表現されている
費用対効果の観点から、エビデンス絶対主義が見直されつつあり、医学でも実装医学が重要視されつつある
ステップ４：過去を制御する
ステップ５～７：反復/持続している自己のパターンを認め、変わるように求めて祈る

『つながりの作法―同じでもなく違うでもなく』（綾屋さん＆熊谷さん）
・自助グループ内で特定メンバーがグループを支配しないようにするため
・属人化されない構成的体制

ステップ８：「私達が傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった」（→ 責任を取りたいと becoming する）
ステップ９：埋め合わせを実行に移す
ステップ 10：棚卸を何度も繰り返す
ステップ 11：自分の意志ではなく、自分が理解した神の意志を知り、それだけを行っていく力を祈りと黙想によって求める
ステップ 12：次の仲間へ自分のストーリーを伝える

・ステップ 12 からわかるように、責任は意志の対する概念でむしろ中動態と相性のいい概念なのでは？
「つまり、詫びる気持ちが、自分を場所として、過去の振り返りを通じて過去との連続性のなかで出てきたときに、責任ということがはじめて言えるのではないか。」

・ヴィクトール・フランクル（当事者研究に影響を受けた）
「「私は人生に何を期待できるのか」ではなく、「人生は私に何を期待しているか」を考え続けること、それが責任である」

・覚悟：過去から今へと続く流れ、運命を我がものにする
cf）運命愛：ニーチェが言い、ドゥルーズが注目した
・諦念：切断したいのに、切断できないことへの絶望

「責任が生成変化（becoming）であるとしたら、それは主語＝主体を場所として、使用を通じて自己が構成される過程と無関係ではない。責任を引き受けるときにも、その責任に向かって何かを使用する自己が生成していると考えるべきではないだろうか。」
※上記の「使用」は「支配」と異なることに注意する

・古い体質の組織には、尋問の言語ですぐ個人に責任を押し付けるところがある

・「高信頼性組織研究」（High Reliability Organization、救急や航空関連など失敗が許されない組織の研究）では「ジャスト・カルチャー」が採用されている
→ 「ジャスト・カルチャー」では失敗を許容し、犯人探しをしない、その代わり自分が経験したことはすべて話す（罰すると人は隠す）
→ 失敗を組織全体の問題ととらえ、すべて話すことによって、知識知として蓄積される
「本気で失敗を減らしたいのであれば、失敗を許さなくてはいけない」

・一方で、当事者研究においては、仲間でずっと過ごすわけではなく、ひとりの時間ももうける
「ひとりになる局面がある」「自分の苦労は仲間に奪われてはいけない」（べてるの家において）

・アレント「孤独は思考のための条件」
孤独（solitude）：自分が自分自身と一緒にいること
寂しさ（loneliness）：自分自身と一緒にいられないときに、人に対して抱く感情

（私見）ここで問題視されている責める文化、尋問する文化はなぜ生まれるのかについても考察の必要がある。「ジャスト・カルチャー」が重要であるとは頭でわかっていてもそれができていないのが現状だと思われるからである。そして、この文化は人間の「罰したい」「批判したい」欲が原因で、そして、それは「他者と比較する」欲求のせいだと思われる。すなわち、この原因については脳科学的に説明できるのではないか。